

佛蘭西法律書
訴訟法
四

館書圖京東	
函 四 一	門 新
架 二	部 一 一
號 六 九 九 四	類

CF2
3
07

共
八
本

本
冊

031101-021-9

CF2-3-07

仏蘭西法律書

文部省

M3-7

BBC-0770



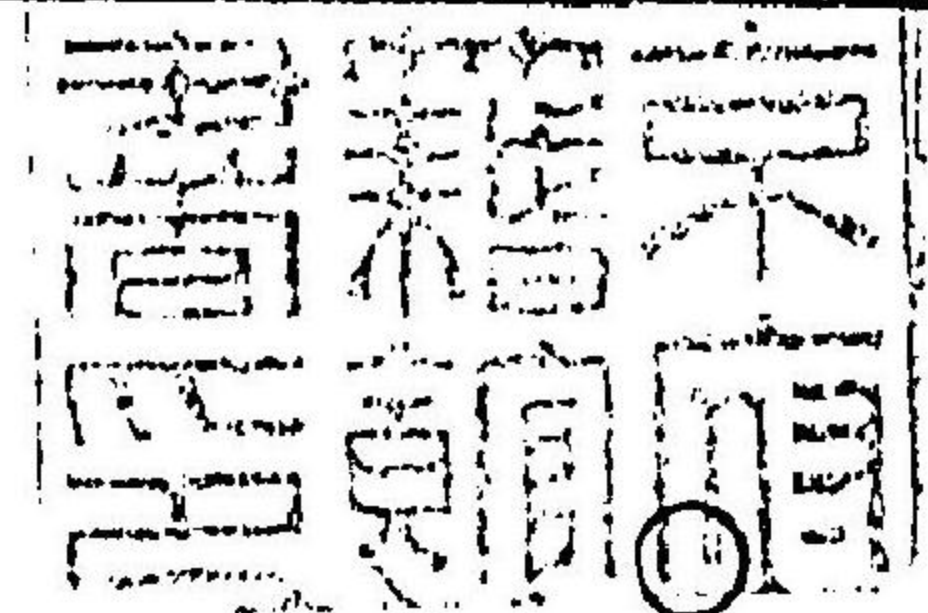
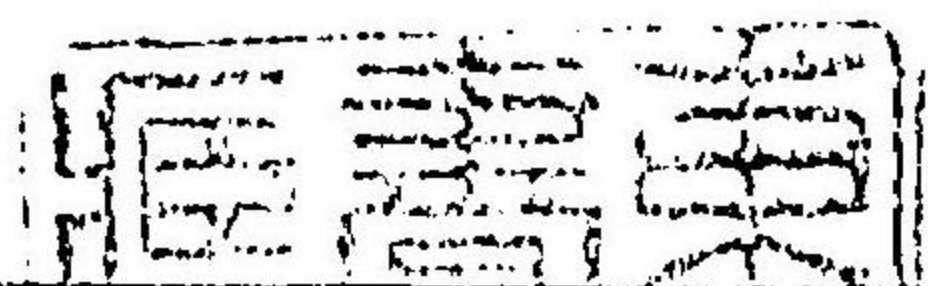
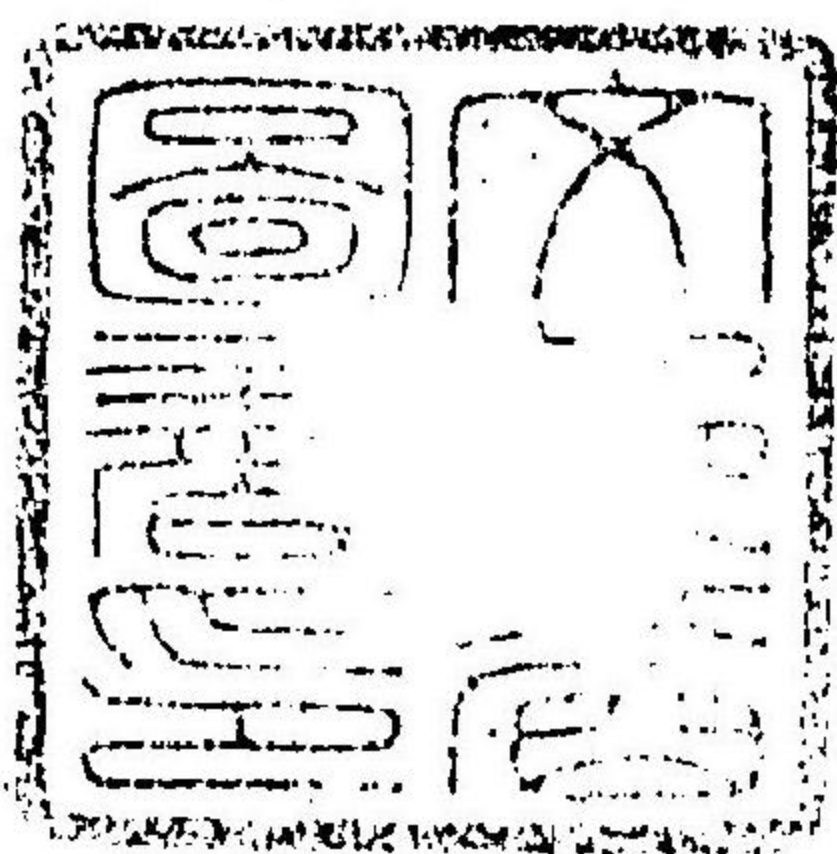
明治六年九月刊行

權大内史箕作麟祥譯

佛蘭西 法律書 訴訟法

文部省

CF 3 07



佛蘭西
法律書
訴訟法
第四

權大内史箕作麟祥 譯

第三卷 控訴院(千八百六十六年四月十七日
決定同月廿七日布告)

○第一章 控訴及其手續

第四百四十三條 (千八百六十二年五月三日如
左改ム)控訴ヲ為ス可キ期限ハ二月内ナリト
ス但シ其期限ハ原告被告雙方共ニ初告裁判

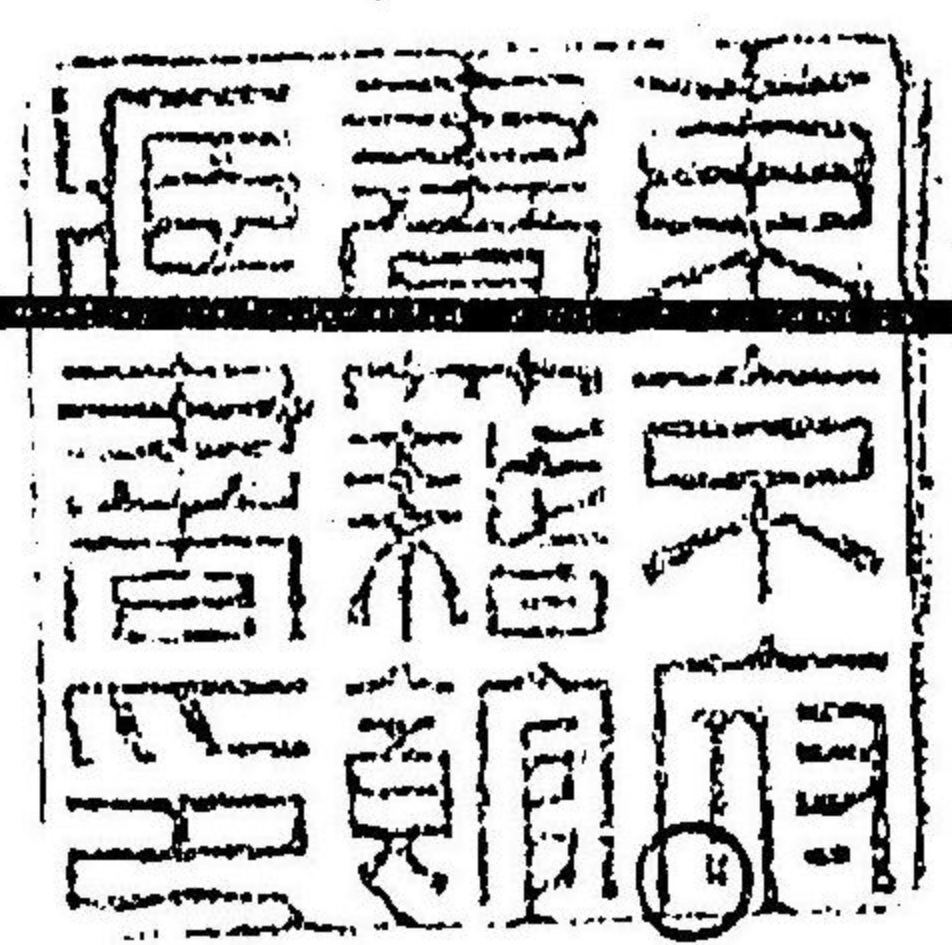
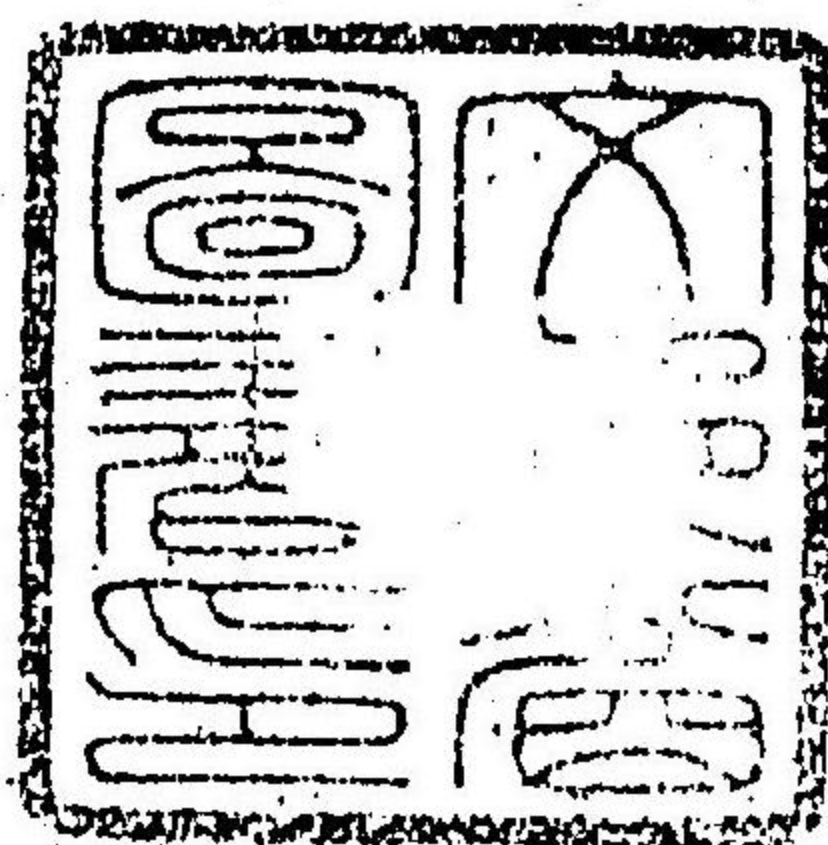
明治六年九月刊行

權大内史箕作麟祥譯

佛蘭西法律書 訴訟法

文部省

CF2
3
07



佛蘭西法律書 訴訟法 第四

權大内史箕作麟祥 譯

第三卷 控訴院(千八百六十六年四月十七日
決定同月廿七日布告)

○第一章 控訴及ヒ其手續

第四百四十三條 (千八百六十二年五月三日如
左改ム)控訴ヲ為ス可キ期限ハ二月内ナリト
ス但シ其期限ハ原告被告雙方共ニ初告裁判

佛蘭西訴訟法四

上篇第三章第一章

文部省

所ニ出席シテ裁判言渡ヲ受ケタル時ハ其言渡書ヲ一方本人又ハ其住所ニ送達シタル日ヨリ之ヲ數フ可シ

一方ノ者抗傳シテ諸國裁判所ノ裁判言渡ヲ受ケタル時ハ其言渡ニ付キ故障ヲ述フルヲ得サルニ至リシ日ヨリ之ヲ數フ可シ

然レ控訴ノ被告人嘗テ初告裁判所ヨリ得タル言渡書ヲ控訴ノ原告人ニ送達シ其被告人後ニ控訴ヲ為ス可キ旨ヲ別段其言渡書ニ附記セサルト雖モ二月ノ後ニ至リ其原告人ノ

主タル控訴ヲ為ス間何時ニ限ラス其被告人附帶ノ控訴ヲ為スヲ得可シ

第四百四十四條 前條ニ記シタル二月ノ期限

ヲ過クル時ハ控訴ヲ為スヲ得ス又如何ナル者邑、公會、社、幼者、常産ノ禁ト雖モ其期限ノ後ニ至テハ控訴ヲ為スノ權ヲ失ヒ唯己レノ支配人及ヒ後見人ニ對シテ償ヲ得ントスル訴ヲ為スヲ得可シ但シ幼者ニ付テハ其後見人ノ監察者初告裁判所ノ訴訟ニ自カラ管セサリシ時ト雖モ其裁判所ノ言渡書ヲ監

察者ト後見人トニ送達シタル日ヨリ其期限ヲ數、可シ

第四百四十五條 〔千八百六十二年五月三日如左改ム〕佛蘭西ノ本國外ニ住スル者ハ控訴ヲ為スニ付キ初告裁判所ノ言渡書ノ送達ヲ得タルヨリ二月ノ期限ノ上更ニ第七十三條ニ記シタル被告人呼出ノ猶豫ノ期限ヲ得可シ

第四百四十六條 〔千八百六十二年五月三日如左改ム〕公務ノ任ヲ受ケタルニ因リ佛蘭西ノ本國外又ハ「アルゼリ」ノ地外ニ在ル者ハ控

訴ヲ為スニ付キ初告裁判所ノ言渡書ノ送達ヲ得タルヨリ二月ノ期限ノ上更ニ八月ノ猶豫ノ期限ヲ得可シ又航海ノ為メ外國ニ在ル海客ニ付テモ同上猶豫ノ期限アリトス

第四百十七條 控訴ヲ為ス可キ期限ノ經過ハ初告裁判所ニテ負訴訟トナリシ者ノ死去シタル日ヨリ之ヲ止ム可シ
其期限ハ第六十一條ニ記シタル法式ヲ以テ死者ノ住所ニ初告裁判所ノ言渡書ヲ更ニ送達シタル時ヨリ再ヒ之ヲ算ヘ始ム可シ但シ

死者ノ遺物相續人自録ヲ記シ熟考ヲ為ス可
 キ期限ノ終ラサル前ニ更ニ其言渡書ヲ送達
 レタル時ハ其期限ノ終ル時ヨリ再ヒ控訴ノ
 期限ヲ算ヘ始ム可シ
 初告裁判所ノ言渡書ヲ死者ノ住所ニ更ニ送
 達スルニハ遺物相續人ノ各自ノ姓名及ヒ身
 分ヲ記スルヲナク其連名宛ヲ以テ之ヲ為ス
 可ク得可シ

第四百四十八條 初告裁判所ニテ贋造ノ證書
 ニ據リ裁判言渡ヲ為シタル時又ハ一方ノ者

其相手方ノ為メニ己レノ證書ヲ陰藏セラレ
 之ヲ差出ス可ク得サルニ因リ初告裁判所ニ
 テ負訴訟トナリシ時ハ後ニ其相手方其證書
 ノ贋造ナルコトヲ自認シタル時又ハ裁判所ニ
 テ其贋造ナルコトヲ證シタル時又ハ相手方ノ
 陰藏シタル證書ヲ取返シタル時ヨリ控訴ノ
 期限ヲ算フ可シ但シ相手方ノ陰藏シタル證
 書ヲ取返シタル時ハ之ヲ取返セシ日ヲ證明
 スルヲ得可キ證書アルコトヲ必要トス

第四百四十九條 假ニ執行ヲ可キモノニ非サ

ル初告裁判所ノ言渡ハ控訴ハ其言渡ノ日ヨリ八日内ニ之ヲ為ス可カラス若シ其期限内ニ為シタル控訴ハ控訴院ニテ之ヲ取上ケサル可シ但シ猶控訴ヲ為サント欲スル者ハ之ヲ為シ得可キ期限内ニ更ニ控訴ヲ為スヲ得可シ

第四百五十條 假ニ執行ヲ可キモノニ非サル初告裁判所ノ言渡ハ前條ニ記スル八日ノ期限内其執行ヲ延ハス可シ

第四百五十一條 訴訟ノ本案ニ管セサル預審

ノ裁判言渡ノ控訴ハ確定ノ言渡ノ後其確定ノ言渡ノ控訴ト共ニ之ヲ為ス可ク且其控訴ノ期限ハ確定ノ裁判言渡書ノ送達ヲ得タル日ヨリ之ヲ數フ可シ但シ其預審ノ言渡ノ執行ヲ受タル時後ニ控訴ヲ為スヲアル可キ旨ヲ斷リ置カスト雖モ控訴院ニテ其控訴ヲ取上ク可シ
 本案ニ管ス可キ預審ノ言渡ノ控訴ハ確定ノ言渡ノ前ニ之ヲ為スヲ得可シ又假ニ執行ヲ可キ言渡ニ付テモ確定ノ言渡ノ前ニ其控

訴ヲ為スヲ得可シ

第四百五十二條 訴訟ヲ吟味シテ確定ノ裁判

ヲ為スヲ得可キニ至ラシムル手續ニ付テノ

言渡ヲ本案ニ管セラル預審ノ言渡トス

裁判所ニテ確定ノ裁判言渡ヲ為ス前證書ヲ

以テ證ヲ立ツル事書類ノ驗真ヲ為ス事又ハ

其他本案ニ管スル吟味ノ手續ニ付キ為シタ

ル言渡ヲ本案ニ管スル預審ノ言渡トス

第四百五十三條 始審ノ裁判言渡ヲ為ス可キ

訴訟ニ付キ初告裁判所ニテ為シタル裁判言

渡ハ終審ノ言渡ナリト記シタル時ト雖凡之

ヲ控訴スル事ヲ得可シ

終審ノ裁判言渡ヲ為ス可キ訴訟ニ付キ初告

裁判所ニテ為シタル裁判言渡ハ終審ノ言渡

ナリト記スルヲナク又ハ始審ノ言渡ナリト

記シタル時ト雖凡其言渡ヲ控訴スルヲ得

ス

第四百五十四條 初告裁判所ノ管轄ヲ受ケサ

ルヲニ管シタル訴ニ付テハ其裁判所ニテ終

審ノ裁判言渡ヲ為ス時ト雖凡其言渡ヲ控訴

スルヲ得可シ

第四百五十五條 初告裁判所ニテ一方ノ者抗
 傳シテ裁判言渡ヲ受ケタル時ハ其者初告裁
 判所ニ其言渡ニ付テノ故障ヲ述フルヲ得可
 キ時間控訴院ニ控訴ヲ為スヲ許サス

第四百五十六條 控訴書ニハ法律ニテ定メタ
 ル定期内ニ相手方ヲ控訴院ニ呼出ス旨ヲ記
 シ之ヲ其相手方本人又ハ其住所ニ送達ス可
 シ若シ其法式ヲ行ハサル時ハ其書面ノ効ナ
 カル可シ

第四百五十七條 確定ノ裁判又ハ本案ニ管ス

ル預審ノ裁判言渡ノ控訴ヲ為ス時ハ其裁判
 言渡ノ執行ヲ止ム可シ但シ別段法律上ニ定
 メタル場合ニ於テ假ニ其言渡ノ如ク執行ノ
 可キヲ定メタル時ハ格別ナリトス

初告裁判所ニテ終審ノ裁判言渡ヲ為スコカ
 ラサル事件ニ付キ誤テ終審ノモノナリト記
 シタル言渡書ノ執行ヲ止ムル為メニハ控訴
 ヲ為ス者相手方ヲ定期ヨリ更ニ短キ時間ニ
 控訴院ニ呼出シ其吟味ノ席ニテ其執行ヲ止

ム可キノ言渡ヲ受ク可シ
 初告裁判所ニテ終審ノ言渡ヲ為スヲ得可
 キ場合ニ於テ其言渡ヲ終審ノモノナリト記
 セス又ハ始審ノモノナリト記シタル時ハ控
 訴ノ被告人其代書師ヲシテ控訴ノ原告人ノ
 代書師ニ招書ヲ送ラシメ之ヲ控訴院ノ吟味
 ノ席ニ呼出シテ其初告裁判所ノ言渡ヲ假ニ
 執行フ可キノ言渡ヲ受クルヲ得可シ
 第四百五十八條 若シ初告裁判所ノ言渡ヲ假
 ニ執行フ可キ場合ニ於テ之ヲ言渡サ、ル時

ハ控訴ノ被告人其代書師ヲシテ原告人ノ代
 書師ニ招書ヲ送ラシメ其原告人ヲ控訴院ノ
 吟味ノ席ニ呼出シ控訴ノ裁判言渡ノ前ニ初
 告裁判所ノ言渡ヲ假ニ執行フ可キノ言渡ヲ
 受クルヲ得ヘシ

第四百五十九條 別段法律上ニ定メタル場合

第三十五條見合ヒニ非スシテ初告裁判所ヨリ其言渡

ヲ假ニ執行フ可キトシテ言渡シタル時、控訴
 ノ原告人定期ヨリ更ニ短キ時間ニ控訴ノ被
 告人ヲ控訴院ノ吟味ノ席ニ呼出シ其執行ヲ

止ム可キノ言渡ヲ受クルヲ得可シ但シ其原告人定期ヨリ更ニ短キ時間ニ其被告人ヲ呼出ス可キ願書ヲ控訴院ノ上席人ニ出シタルノミニシテ其書面ヲ被告人ニ送ルヲナク直ニ其上席人ヨリ初告裁判所ノ言渡ノ執行ヲ止メシム可カラス

第四百六十條 前數條ニ記シタル場合ノ外ハ控訴院ヨリ初告裁判所ノ言渡ノ執行ヲ禁止又ハ如何ナル方法ヲ問ハス之ヲ止ム可キノ言渡ヲ為ス可カラス若シ此規則ニ背キ控訴

院ニテ為シタル言渡ハ其効ナカル可シ

第四百六十一條 初告裁判所ニテ書面ニ因リ

吟味ヲ為シタル訴訟ノ裁判言渡ト雖モ之ヲ控訴スル時ハ書面ヲ用ヒス直チニ控訴院ノ吟味ノ席ニ其控訴ヲ為ス可シ但シ控訴院ニテ格別ノ道理アルト思量スル時ハ再ヒ書面ニ因テ之ヲ吟味ス可キヲ言渡ス可シ

第四百六十二條 控訴ノ被告人代書師ヲ任シ

タルヨリ八日内ニ控訴ノ原告人ハ初告裁判所ノ言渡ニ承服セサル憑據ヲ書面ニ記シテ

被告人ニ送達シ其被告人ハ其後八日内ニ答
辯書ヲ送ル可シ但シ其他ノ手續ナク原告人
ヨリ被告人ニ吟味ノ席ニ出ツ可キヲ要ム
可シ

第四百六十三條 急速吟味ノ法式ヲ以テ為シ
タル裁判言渡ノ控訴ハ一方ノ代書師ヨリ相
手方ノ代書師ニ招書ヲ送ルノミニテ其他ノ
手續ナク之ヲ控訴院ノ吟味ノ席ニ上告ス可
シ又控訴ノ被告人定期内ニ其代書ヲ任セサ
ル時ハ通常ノ法式ヲ以テ為シタル裁判言渡

ノ控訴ニ付テモ亦同一ナリトス

第四百六十四條 控訴ノ時ハ嘗テ初告裁判所ニ

述ヘタルヨリ更ニ新タル訴ヲ為ス可カラ
ス但シ義務ヲ互ニ消殺スルニ付キ新タル
訴ヲ為シ又ハ主タル訴訟ノ助トシテ新タル
ル訴ヲ為スヲハ之ヲ許ス

又一方ノ者ハ初告裁判所ノ言渡ノ後相手方
ヨリ得可キ息銀、年金ノ額、家屋ノ貸賃及ヒ其
他ノ附加シタル諸件ヲ得ント欲スルヲ控
訴院ニ訴ヘ又ハ初告裁判所ノ言渡ノ後損害

ヲ受ケタルニ付キ其償ヲ相手方ヨリ得ント
欲スルヲ控訴院ニ訴フルヲ得可シ

第四百六十五條 前條ニ記シタル場合ニ於テ

一方ノ者控訴院ニ新タル訴訟ヲ為サント
スルニハ其代書師ヨリ相手方ノ代書師ニ其
新タル訴訟ヲ為スノ道理ヲ記シタル趣意
書ヲ送達セシメテ之ヲ為ス可シ

又一方ノ者以前初告裁判所ニ差出シタル趣
意書ノ條件ヲ更改セント欲スル時モ亦其更
改ヲ為ス道理ヲ記シタル趣意書ヲ相手方ニ

送達ス可シ

初告裁判所又ハ控訴院ニ嘗テ出シタル憑據
書及ヒ答辯書ト同一ナル書面ヲ更ニ控訴院
ニ出シタル時ハ其費用ヲ裁判費用中ニ加フ
可カラス

既ニ一度出シタル書面ニ記セシ憑據及ヒ答
辯ト新タル憑據及ヒ答辯トヲ相混シ
テ記シタル書面ヲ控訴院ニ出シタル時ハ其
書面中ニテ新タル憑據及ヒ答辯ヲ記
シタル部分ノミノ費用ヲ裁判費用中ニ加フ

可レ

第四百六十六條 原告被告ノ受ケタル裁判言
渡ヲ取消サント訴フル權アル者ニ非レハ原
告被告ニ非サル者控訴ニ管涉スルヲ許サ
ス

第四百六十七條 控訴院ノ裁判後數頁ニ三箇
以上ノ説アル時ハ最モ寡數ノ裁判役他ノ二
箇ノ説中ノ一箇ニ從フ可レ

第四百六十八條 控訴院ニテ一箇ノ説ヲ非ト
スル者ノ數ト可トスル者ノ數ト均レキ時ハ

其説ヲ決ス可キ為メ其訴訟ニ管セサル裁判
役一頁ヲ其受任ノ順序ニ從ヒ呼迎ハ又ハ奇
數ヲ以テ數頁ヲ呼迎ヘ其訴訟ヲ更ニ吟味レ
又書面ニ因リ吟味ヲ為ス可キ時ハ掛リ裁判
役ヲレテ更ニ其申立ヲ為サシム可レ

控訴院ノ裁判役皆其訴訟ノ吟味ニ管レ其説
ノ決セサル時ハ之ヲ決スル為メ先ニ登級レ
タル順序ヲ以テ法律家ニ三頁ヲ呼迎フ可レ
第四百六十九條 控訴ヲ定期ノ時間停止レタ
ルニ因リ其訴ノ手續ヲ取消ト為スニ至リシ

時ハ再ヒ其控訴ヲ為ス^{コト}ヲ得ス^{レテ}初告裁判所ノ言渡ヲ裁判ヲ經タル事ノカアリトス
 第四百七十條 前數條ニ記シタル規則ヲ除ク
 ノ外初告裁判所ノ規則ヲ控訴院ニ通シ用フ
 可シ

第四百七十一條 治安裁判所ノ言渡ノ控訴ヲ
 為ス者負訴訟トナル時ハ五^フランクノ罰金
 ヲ言渡サル可ク又初告裁判所又ハ商法裁判
 所ノ言渡ノ控訴ヲ為ス者負訴訟トナル時ハ
 十^フランクノ罰金ヲ言渡サル可シ

第四百七十二條 控訴ノ上控訴院ニテ初告裁
 判所ノ言渡ヲ確定シタル時ハ其初告裁判所
 ニテ其言渡ヲ執行フ可シ又控訴院ニテ初告
 裁判所ノ言渡ヲ取消レタル時ハ其控訴院又
 ハ控訴院ヨリ別段指定ノタル初告裁判所ニ
 テ原告被告ノ間ニ其言渡ヲ執行フ可シ但シ
 初告裁判所ヨリ言渡レタル禁錮又ハ不動産
 ノ差押ヲ取消ス可キ控訴院ノ言渡ノ執行及
 ヒ其他別段法律上ニ其執行ノ管轄ヲ定メタ
 ル諸件ハ各其管轄ノ初告裁判所ニテ之ヲ取

扱可レ

第四百七十三條 訴訟ノ本案ニ管スル預審ノ
 言渡ノ控訴ヲ為シ控訴院ニテ其言渡ヲ取消
 シタル時其本案ヲ裁判スルヲ得可キ手續
 ニ至リシニ於テハ控訴院ニテ其本案ヲモ亦
 一通ノ言渡書ヲ以テ同時ニ裁判ス可レ
 又控訴院ニテ初告裁判所ノ確定ノ裁判言渡
 ヲ法式ニ背キタルト為レテ之ヲ取消シ又ハ
 其他本案ニ非サル事ニ付キ之ヲ取消シタル
 時ハ控訴院ニテ其本案ヲモ亦裁判ス可レ

○第四卷 裁判言渡ヲ取消サントスル為

メノ異常ノ方法(千八百六年四月十七
 日決定同月二十七日布告)

○第一章 原告及ヒ被告ニ非サル者ヨ
 リ裁判取消ヲ訴フル事

第四百七十四條 人自カラ呼出ヲ受ケス又其
 名代人呼出ヲ受ケスレテ己レノ權利ノ害ト
 ナル可キ裁判言渡アル時ハ其言渡ヲ取消ト
 為ス可キヲ訴フルヲ得可レ

第四百七十五條 原告及ヒ被告ニ非サル者裁

判所ノ言渡ヲ取消ス可キヲ主タル訴訟ト
 為レテ願出ントスル時ハ嘗テ其言渡ヲ為セ
 レ裁判所ニ願出ツ可レ
 又甲ノ裁判所ニテ為ス所ノ訴訟ニ付キ乙ノ裁
 判所ノ言渡ヲ取消ス可キヲ附帶ノ訴訟ト
 レテ願出ントスル時甲ノ裁判所其言渡ヲ為
 セレ乙ノ裁判所ト同等又ハ上等ナルニ於テ
 ハ其訴訟ヲ為ス所ノ裁判所ニ願書ヲ出レテ
 其取消ヲ訴フ可レ
 第四百七十六條 其訴訟ヲ為ス甲ノ裁判所其

言渡ヲ為セレ乙ノ裁判所ヨリ下等ナル時ハ
 其言渡ヲ他人ヨリ取消サント願フ附帶ノ訴
 訟ヲ主タル訴訟トシテ其言渡ヲ為セレ乙ノ
 裁判所ニ持出ス可レ
 第四百七十七條 前條ノ場合ニ於テ其訴訟ヲ
 裁判ス可キ裁判所即チ甲ノハ其時ノ景狀ニ
 從ヒ其本案ノ裁判ヲ為シ又ハ之ヲ猶豫スル
 ヲ得可レ
 第四百七十八條 裁判ヲ經タル事ノカアル言
 渡ニ因リ不動産ヲ拋棄ス可キ裁判アル時ハ

他人ヨリ其言渡ノ取消ヲ訴ヘタルニ管セス
 之ヲ其原告ト被告トノ間ニ執行ヲ可シ但シ
 其言渡ヲ執行ト雖モ他人ヨリ取消ヲ願フタ
 ル訴ノ害トナルヲナカル可シ
 其他ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ其時ノ景狀
 ニ從ヒ其言渡ノ執行ヲ止ムルヲ得可シ
 第四百七十九條 原文及ヒ被告ニ非サル者裁
 判言渡ノ取消ヲ訴ヘ其訴ノ負訴訟トナリタ
 ル時ハ五十「フラン」ヨリ少カラザル罰金ヲ
 言渡サレ又別段ノ道理アル時ハ損失ノ償ヲ

言渡サル可シ、

○第二章

敬慎ノ願書

負訴訟トナリシ者第四百八十一條

ニ記列シタル諸件ヲ申述テ
裁判言渡ノ取消ヲ願フヲ云テ

第四百八十條 初告裁判所及ヒ控訴院ニテ原
 告被告双方ノ面前ニテ為シタル終審ノ裁判
 言渡アル時及ヒ一方ノ者抗傳ノ時為シタル
 終審ノ裁判言渡ヲ既ニ故障ヲ述フルヲ得
 サルニ至リシ時ハ一方ノ者ノ願ニ因リ左ノ
 諸件ニ付キ其言渡ヲ取消ト為スヲ得可シ
 第一 相手方本人ノ詐偽アル時

- 第二 裁判言渡ノ前又ハ裁判言渡ノ時欠ク可カラサル法式ヲ欠キシ時但シ其法式ヲ欠キタルニ因リ本人其言渡ノ取消ヲ願フ可キ時其定期ヲ過シタルニ於テハ格別ナリトス
- 第三 本人ヨリ訴出サ、ル事柄ニ付キ裁判言渡アリシ時
- 第四 本人ノ訴出シタルヨリ更ニ餘分ノ事ニ付キ裁判言渡アリシ時
- 第五 本人ノ訴タル箇條中ノ一箇ヲ裁判

言渡ニ遺脱シタル時

- 第六 同シ裁判所ニテ同シ双方本人ノ間同シ事柄ニ付キ二箇ノ終審ノ裁判言渡ノ互ニ齟齬シタル時
- 第七 一箇ノ裁判言渡書中ニ齟齬シタル事アル時
- 第八 檢察官ニ報知ス可キ場合ニ於テ其報知ヲ為サスレテ檢察官ヨリ權利ノ保護ヲ受ク可キ者ノ負訴訟トナリシ時
- 第九 裁判言渡ノ後其裁判ニ用ヒタル證

書ヲ相手方ニテ贋造ナリト自認シ又ハ
裁判所ニテ贋造ナリト言渡シタル時

第十 相手方ノ隠藏シタル至重ノ證書類
ヲ裁判言渡ノ後ニ取返シタル時

第四百八十一條 官府邑公舎幼者ハ之ニ代テ
訴ヲ為ス者ノアラサリシ時又ハ其代人アリ
シト雖モ法ニ適シテ其訴ヲ為サリシ時ハ其
言渡ヲ受ケタル裁判ノ取消ヲ訴フルヲ得
可レ

第四百八十二條 裁判言渡書中ノ一箇條ノミ

ニ付キ取消ヲ訴フルヲ得可キハ其箇條ノ
ミヲ取消ト為スヲ得可シ但シ他ノ箇條其
一箇條ニ屬シタル事ナル時ハ格別ナリトス

第四百八十三條 〔千八百六十二年五月三日如

左改ム〕敬慎ノ願書ハ丁年者ニ付テハ其本人
又ハ其住所ニ裁判言渡書ノ送達ヲ得タル日
ヨリ二月内ニ相手方ニ對シテ裁判所ニ出席
ヲ要ムル呼出狀ト共ニ之ヲ其相手方ニ送達
ス可シ

第四百八十四條 〔千八百六十二年五月三日如

左改△幼者ニ付テハ其丁年ニ至リシ後其本人又ハ其住所ニ裁判言渡書ノ送達ヲ得タル日ヨリ其二月ノ期限ヲ數フ可シ

第四百八十五條 〔千八百六十二年五月三日如左改△〕幼者ニ付テハ其丁年ニ至リシ後其本人又ハ其住所ニ裁判言渡書ノ送達ヲ得タル日ヨリ其二月ノ期限ヲ數フ可シ

第四百八十五條 〔千八百六十二年五月三日如左改△〕公務ノ任ヲ受ケタルニ因リ佛蘭西本國又ハ「アルゼリ」ノ地ニ在サル者ニ付テハ

其者其裁判言渡書ノ送達ヲ得タルヨリ二月ノ期限ノ外更ニ八月ノ期限ヲ増ス可シ
航海ノ為メ同上ノ地ニ在ラサル海客ニ付テモ亦之ニ等シトス

第四百八十六條 〔千八百六十二年五月三日如左改△〕佛蘭西本國外ニ居住スル者ニ付テハ其者其裁判言渡書ノ送達ヲ得タル日ヨリ二月ノ期限ノ外第七十三條ニ記シタル呼出ノ期限ヲ増ス可シ

第四百八十七條 裁判言渡ヲ受ケタル者其取

消ヲ願フ可キトニ付キ前數條ニ定メル期限
内ニ死去シタル時ハ其相續人其取消ヲ願フ
可キ期限ヲ第四百四十七條ニ記シタル期限
ヨリ數ヲ可シ但シ其方法モ又同上ニ記シタ
ル所ニ循フ可シ

第四百八十八條 證人ノ贋造ナルト又ハ新々
ニ證書ヲ見出シタルト又ハ相手方ノ詐偽ニ
因リ一方ノ者敬慎ノ願書ヲ出ス時ハ相手方
ニテ證書ノ贋造又ハ詐偽ヲ自認シタル日又
ハ新々ニ證書ヲ見出シタル日ヨリ二月ノ期

限ヲ數フ可シ但シ證書ヲ見出シタル場合ニ
於テハ之ヲ見出シタル日ヲ證明ス可キ證書
アルトヲ必要トス

第四百八十九條 二箇ノ裁判言渡ノ互ニ齟齬
シタル時ハ後ノ言渡書ノ送達ヲ得タル日ヨ
リ二月ノ期限ヲ數フ可シ

第四百九十條 敬慎ノ願書ハ裁判言渡ヲ為シ
タル裁判所ニ之ヲ差出シ以前ノ裁判役之ヲ
裁判スルヲ得可シ

第四百九十一條 裁判言渡ヲ為シタルモノニ

非サル裁判所ニテ為ス所ノ訴訟ノ時間相手
 方ヨリ出シタル其裁判言渡書ヲ一方ノ者敬
 慎ノ願書ヲ以テ取消サント願フ時ハ其裁判
 言渡ヲ為シタル裁判所ニ其願書ヲ出ス可シ
 但シ此迄ノ訴訟ヲ裁判ス可キ裁判所ハ其時
 ノ景狀ニ從ヒ其訴訟ヲ裁判レ又ハ之ヲ猶豫
 スルコトヲ得可シ

第四百九十二條 裁判言渡ヨリ六月内ニ敬慎
 ノ願書ヲ出ス時ハ相手方ノ代書師ノ住所ニ
 呼出狀ヲ送リ六月以後ニ於テハ相手方本人

ノ住所ニ其呼出狀ヲ送ル可シ

第四百九十三條 主タル訴訟ヲ裁判ス可キ裁

判所即チ敬慎ノ願書ヲ以テ取消サンニ附帶

ノ訴トシテ敬慎ノ願書ヲ出ス時ハ一方ノ者

ノ代書師ヨリ相手方ノ代書師ニ其旨ヲ告知

スル招書ヲ送ルノミニテ足レリトス然レ裁

判言渡ヲ為シタルモノニ非サル裁判所ニテ

為ス所ノ主タル訴訟ノ附帶ノ訴トシテ敬慎

ノ願書ヲ出ス時ハ其裁判言渡ヲ為セシ裁判

所ニ相手方本人ノ出席ヲ要ムル呼出狀ヲ其

本人ニ送ル可シ

第四百九十四條 官ノ利益ノ為メ契約ヲ為ス者ノ外何人ヲ問ハス敬慎ノ願書ヲ出ス前ニ罰金ノ預備トシテ三百「フラン」ノ金高ト相手方ヘノ損失償ノ預備トシテ百五十「フラン」ノ金高トシテ官署ニ納メ置ク可シ但シ相手方ヘ損失償ノ預備トシテ更ニ多量ノ金高ヲ官署ニ附托ス可キ道理アル時ハ格別ナリトス

一方ノ者抗傳シテ裁判言渡ヲ受ケタル時又

ハ一方ノ者證書ヲ出サスニテ裁判言渡ヲ受ケタル時後ニ敬慎ノ願書ヲ出スニ付キ前ニ記シタル金高ノ半ヲ官署ニ納メ又初告裁判所ノ裁判言渡ニ付キ其願書ヲ出ス時ハ前ニ記シタル金高ノ四分ノ一ヲ官署ニ納ム可シ

第四百九十五條 敬慎ノ願書ノ初メニ裁判言渡ヲ為シタル初告裁判所ヲ管轄スル控訴院ノ管轄地内ニテ少クトモ十年以來其職務ヲ行フタル代言人三頁ヘノ相談書ト金高ノ附托ノ得タル官吏ノ受取書トヲ附記シテ相手

方ニ送達ス可シ

代言人ヘノ相談書ニハ三人共ニ敬慎ノ願書ヲ出ス可キノ説ナル旨ト言渡書ヲ取消ト為ス可キ憑據トヲ記ス可シ然ラサレハ其願書ヲ取上ク可カラス

第四百九十六條 裁判言渡ヨリ六月内ニ敬慎ノ願書ヲ出ス時ハ嘗テ其言渡ノ時代書師々リシ者更ニ別段委任ヲ受クルノ書ヲ得ルナクシテ當然猶其代書師タル可シ

第四百九十七條 敬慎ノ願書ヲ出スト雖凡既

ニ言渡レタル裁判執行ノ差支トナルトナク又其執行ノ猶豫ヲ許ス可カラス○不動産所有ノ權ヲ拋棄ス可キノ言渡ヲ受ケタル者敬慎ノ願書ヲ出サレドスルニハ其言渡ノ如ク既ニ執行ヒタル證書ヲ出ス可シ

第四百九十八條 總テ敬慎ノ願書ハ之ヲ檢察官ニ報知ス可シ

第四百九十九條 代言人ヘノ相談書ニ記シタル敬慎ノ願書ヲ出ス憑據外ノ憑據ハ吟味ノ席ニテ之ヲ辨論ス可ラス又書面ヲ以テ之ヲ

迷ノ可カラス

第五百條 敬慎ノ願書ヲ却還スル時ハ其言渡
ト共ニ其願書ヲ出シタル者ニ前ニ記シタル
罰金ト相手方ヘノ損失ノ償トヲ拂フ可キ
ヲ言渡ス可シ但シ別段ノ道理アル時ハ相手
方ニ更ニ多量ノ償ヲ拂フ可キヲ言渡ス可
シ

第五百一條 敬慎ノ願書ノ如ク允許スル時ハ
以前ノ裁判言渡ヲ取消シ其言渡前ノ景狀ニ
復シテ附托シタル金高ヲ還シ且相手方ヲシ

テ其言渡ニ因リ得タル諸件ヲ還サシム可シ
二箇ノ裁判言渡ノ互ニ齟齬シタルニ付キ敬
慎ノ願書ノ如ク允許シタル時ハ其二箇中初
メノ裁判言渡ノ如ク執行フ可キヲ言渡ス
可シ

第五百二條 訴訟ニ附帶シタル事ニ付キ為シ
タル裁判言渡ヲ敬慎ノ願書ニ因リ取消シタ
ル後其訴訟ノ本案ハ其取消ヲ為シタル裁判
所ニテ裁判ス可シ

第五百三條 既ニ敬慎ノ願書ヲ出シテ取消ヲ

訴タルト雖取消スヲ得サリレ裁判言渡
 又ハ敬慎ノ願書ヲ却還スル裁判言渡又ハ敬
 慎ノ願書ノ如クニ因リ允許シタル後訴訟ノ
 本案ニ付キ為シタル裁判言渡ハ何人ヲ論セ
 ス再ヒ敬慎ノ願書ヲ出シテ之ヲ取消サント
 訴フルヲ得ス若シ再ヒ之ヲ訴フルト雖
 其効ナク且本人ハ言ヲ待タス初メノ願書ト
 後ノ願書トヲ出スヲ管シタル其代書師ニ
 於テモ亦相手方ニ損失ノ償ヲ為ス可シ
 第五百四條 二箇ノ裁判所ニ於テ同シ双方本

人ノ間ニ同シ事柄ニ付キ為シタル終審ノ裁
 判言渡ノ互ニ齟齬スル時ハ覆審院ニ訴出ツ
 可シ但シ此場ニ於テハ覆審院ノミニ用フ可
 キ法式ヲ以テ訴ヲ為シ且之ヲ裁判ス可シ第
 百八十七條
 見合セ

○第三章 裁判役不正ノ裁判ヲ為シタ
 ルニ因リ損失ヲ受ケタル時其裁判
 ヲ取消シ其償ヲ得ントスルニ付テ
 ノ訴訟

第五百五條 左ノ場合ニ於テハ裁判言渡ヲ取

消シ裁判役ヨリ償ヲ求ムルヲ得可シ

第一 裁判役訴訟ノ時間又ハ裁判言渡ノ時詐偽及ヒ受職ノ疑アル時

第二 裁判言渡ヲ取消シ裁判役ヨリ償ヲ求ムルノ訴ヲ為シ得可キヲ法律上ニ於テ別段定メタル時

第三 裁判役ノ法ニ背キタル處置ヲ為シタルニ因リ本人ヘノ損失償ヲ擔當ス可キヲ法律上ニテ別段定メタル時

第四 裁判役ノ裁判ヲ為スヲ肯セサル

時

第五百六條 裁判役本人ノ願ニ答フルヲ肯セス又ハ既ニ裁判ヲ為シ得可キ手續トナリシ訴訟及ヒ其手續ニ至ラントスル訴訟ノ裁判ヲ怠ル時ハ裁判ヲ為スヲ肯セサルノ答アリトス

第五百七條 裁判役裁判ヲ為スヲ肯セサル時ハ治安裁判役及ヒ商法裁判所ノ裁判役ニ付テハ本人ヨリ裁判役其裁判ヲ為ス可キヲ願フ書ニ通フ互ニ少クトモ三日ヲ隔テ裁

判所ノ書記官ニ送達シ其他ノ裁判役ニ付テ
ハ此書二通ヲ互ニ少クトモ八日ヲ隔テ送達
ス可シ但シ其送達ヲ為スノ求メヲ受ケテ之
ヲ為サ、ル使吏ハ定期ノ時間其職ヲ罷メラ
ル可シ

第五百八條 此二通ノ書ヲ送リタル後猶裁判
ヲ為サ、ル時ハ其裁判役ニ對シ償ヲ求ムル
コトヲ得ヘシ

第五百九條 治安裁判所、商法裁判所、初告裁判
所、又ハ此等ノ裁判所ノ裁判役中ノ一人及ヒ

控訴院ノ裁判役中ノ一人又ハ重罪審院ノ裁
判役中ノ一人ニ對シ本人ヨリ裁判言渡ヲ取
消テ償ヲ求ムル訴ハ其管轄ノ控訴院ニ之ヲ
為ス可シ

控訴院又ハ重罪審院及ヒ此等ノ裁判所中ノ
一局ニ對シ本人ヨリ其言渡ヲ取消テ償ヲ求
ムル訴ハ佛蘭西共和政治立國第十二年「プロ
レアル」月ノ憲法第百一條ニ循ヒ大審院ニ之
ヲ為ス可シ

第五百十條 然ルニ此訴ヲ為ス可キ裁判所ノ允

許ヲ預メ得ルニ非レハ裁判役ニ對シテ償ヲ
求ムルノ訴ヲ為ス可カラス

第五百十一條 其訴ヲ為スニ付テハ本人又ハ
公正ノ證書ヲ以テ任シタル名代人ノ姓名ヲ
手署シタル願書ヲ出ス可シ但シ其公正ノ證
書ハ其訴ヲ為スニ付テノ證書類アル時ハ其
証書類ト共ニ願書ニ添テ之ヲ出ス可シ此公
正ノ證書ヲ願書ニ添シテ名代人ノ為シタ
ル訴ハ其効ナカル可シ
第五百十二條 其願書ニハ裁判役ニ對シテ不

敬ノ言詞ヲ用フ可カラス若シ之ヲ用ヒタル
時ハ本人ニ相當ノ罰金ヲ言渡シ且其代書師
ニ相當ノ罰又ハ相當ノ時間其職ヲ罷ム可キ
トヲ言渡ス可シ

第五百十三條 其願書ヲ取上ケサル時ハ本人
ニ三百フランクヨリ少カラサル罰金ヲ言渡
シ且別段ノ道理アル時ハ本人ヨリ裁判役ニ
損失ヲ償フ可キトヲ言渡ス可シ

第五百十四條 其願書ヲ取上ケタル時ハ三日
内ニ之ヲ裁判役ニ送達シ其裁判役ハ八日内

ニ其答辨ヲ為ス可シ

其裁判役ハ其訴訟ノ裁判ニ管ス可カラス又
其訴訟ノ確定ノ裁判アル迄ハ其訴ヲ為シタ
ル本人又ハ其宗系ノ親族及ヒ其配偶者ノ其
裁判所ニテ為スル可キ總テノ訴訟ノ裁
判ニ管スルヲ得ス若シ其裁判役ノ管シタ
ル裁判言渡ハ其効ナカル可シ

第五百十五條 裁判役ノ為シタル言渡ヲ取消
シテ其裁判役ヨリ償ヲ求ム可キノ訴ヲ裁判
所ニテ取上ケタル時ハ其本人ノ代書師ヨリ

其裁判役ニ招書ヲ送リテ其裁判役ノ吟味ノ
席ニ出ツ可キヲ要メ控訴院中其訴ヲ取上
ケタルモノニ非サル局ニテ之ヲ裁判ス可シ
若シ控訴院ニ唯一局ノミナル時ハ其訴ヲ覆
審院ノ命ニテ最近ノ控訴院ニ移ス可シ
第五百十六條 其訴ヲ為シタル者負訴訟トナ
ル時ハ三百フランクヨリ少カラサル罰金ノ
言渡ヲ受ケ且別段ノ道理アル時ハ裁判役ニ
對シ損失ノ償ヲ為ス可キノ言渡ヲ受ク可シ

○第五卷 裁判言渡ヲ執行ノ事(千八百六

年八月廿一日決定五月一日布告)

○第一章 保證人ヲ承諾スル事

第五百十七條 保證人ヲ立ツ可キノ言渡ニハ一方ノ者ノ之ヲ立ツ可キ期限ト相手方ノ之ヲ承諾シ又ハ故障ヲ述フ可キ期限トヲ定ム可シ

第五百十八條 一方ノ者保證人ヲ立ル時相手方ニ代書師ナキニ於テハ其本人又代書師アルニ於テハ其代書師ニ保證人ヲ立タル旨ヲ

記シタル書面ト保證人其保證スル所ノ金高
ヲ拂ヒ得可キ證書ヲ裁判所ニ預ケタル旨ヲ
記シタル書面ノ寫トヲ送達ス可シ但シ保證
人其保證スル所ノ金高ヲ拂ヒ得可キ證書ヲ
出ス可キト別段法律上ニ定メサル時ハ格
別ナリトス

第五百十九條 相手方本人ハ裁判所ノ書記局
ニ至テ一方ノ保證人證書ヲ檢視シ其保證人
ヲ承諾スル時ハ其代書師ヲシテ一方ノ代書
師ニ書面ヲ送ラシメ承諾ノ由ヲ告知ス可シ

○此場合ト相手方ニテ定期内ニ保證人ニ付
キ故障ヲ述ヘサル場合トニ於テハ保證人書
記局ニ至テ其保證スル所ノ金高ヲ相違ナク
拂フ可キトヲ證ス可シ但シ保證人ノ證スル
所ハ別ニ裁判所ノ言渡ナクシテ之ヲ執行フ
可ク若シ保證人其證スル所ノ如ク執行ハサ
ルニ因リ之ヲ禁錮ス可キノ道理アル時ハ其
別ニ言渡ナクシテ之ヲ禁錮スルトヲ得可シ
第五百二十條 相手方定期内ニ一方ノ保證人
ニ付キ故障ヲ述フル時ハ其代書師ヨリ一方

ノ代書師ニ證書ヲ送り吟味ノ席ニ出ツ可キ
トヲ要ム可シ

第五百二十一條 保證人ニ付キ故障ヲ述フル
訴ハ別ニ願書及ヒ其他ノ書面ヲ用フルトナ
ク裁判所ニ於テ急速吟味ノ法式ヲ以テ之ヲ
裁判ス可シ但シ其裁判言渡ハ控訴ニ管セス
之ヲ取行フ可シ

第五百二十二條 相手方ヨリ一方ノ保證人ニ
付キ故障ヲ述フル訴ヲ為シタル上裁判所ニ
テ其保證人ヲ立ルトヲ許シタル時ハ其保證

人第五百十九條ニ記レタル如ク書記局ニテ
其證ヲ述フ可シ

○第二章 損失償ノ高ヲ定ムル事

第五百二十三條 裁判所ノ言渡書ニ一方ノ者
相手方ヨリ得可キ損失ノ償高ヲ定メサル時
ハ一方ノ者其高ノ幾許ナル可キヤヲ記シタ
ル書面ヲ相手方ノ代書師ニ送達シ且證書類
ハ相手方ノ代書師ノ請取書ト引替テ之ヲ渡
シ又ハ之ヲ書記局ニ差出レ相手方ヲレテ書
記局ニ至リ之ヲ檢視セシム可シ

第五百二十四條 相手方ハ第九十七條及ヒ第九十八條ニ記シタル定期内ニ其受取りタル一方ノ證書額ヲ還ス可ク若シ之ヲ還サ、ル時ハ右二條ニ記シタル罰ヲ受ク可シ又相手方ハ其定期後八日内ニ己レノ至當ナリト思料セル損失償高ヲ一方ニ提供ス可ク若シ其手續ヲ為サ、ルニ於テハ一方ノ代書師ヨリ相手方ノ代書師ニ招書ヲ送りテ吟味ノ席ニ出ツ可キヲ要メ相手方其席ニテ一方ノ述ヘタル償高ヲ拂フ可キノ言渡ヲ受ク可シ但シ

一方ノ述ヘタル償高ニ付キ證據ナク且不當ナル時ハ格別ナリトス

第五百二十五條 相手方ノ提供シタル償高ニテ十分ナリトノ裁判言渡アル時ハ一方ノ者相手方ノ提供ヲ為シタル日ヨリ以後ノ裁判費用ヲ拂フ可キノ言渡ヲ受ク可シ

○第三章 利得ノ高ヲ定ムル事

第五百二十六條 利得ノ算還ヲ為ス可キ言渡ヲ受ケタル者ハ裁判所ニテ言渡ヲ為ス他ノ算還ニ付キ後ノ數條ニ記シタル規則ニ循ヒ

其算還ヲ為ス可シ

○第四章 算還ノ事

第五百二十七條 裁判所ヨリ任セラレシ算計人ハ之ヲ任シタル裁判所ニ其算還ノ訴ヲ受ケ後見人ハ其後見ヲ為ス地ノ裁判所ニ其算還ノ訴ヲ受ケ其他ノ算計人ハ其住所ノ裁判所ニ其訴ヲ受ケ可シ

第五百二十八條 初告裁判所ニテ算還ノ訴ヲ取上ケサルニ因リ控訴院ニ控訴ヲ為シ控訴院ニテ初告裁判所ノ言渡ヲ取消シタル時ハ以

前訴へ出シタル初告裁判所ニ再ヒ其訴ヲ為シ又ハ控訴院ヨリ別段定メタル他ノ初告裁判所ニ其訴ヲ為ス可キ旨ヲ控訴院ヨリ言渡ス可シ

又既ニ初告裁判所ニ算計書ヲ出シ其裁判言渡アリシ後控訴院ニ控訴ヲ為シ控訴院ニテ初告裁判所ノ言渡ヲ取消シタル時ハ控訴院ニテ其言渡ノ如ク執行ヒ又ハ控訴院ニテ以前裁判ヲ為シタルヨリ更ニ他ノ初告裁判所ヲ別段指定メテ控訴院ノ言渡ヲ執行ハンム

其算還ヲ為ス可シ

○第四章 算還ノ事

第五百二十七條 裁判所ヨリ任セラレシ算計人ハ之ヲ任シタル裁判所ニ其算還ノ訴ヲ受ケ後見人ハ其後見ヲ為ス地ノ裁判所ニ其算還ノ訴ヲ受ケ其他ノ算計人ハ其住所ノ裁判所ニ其訴ヲ受ケ可シ

第五百二十八條 初告裁判所ニテ算還ノ訴ヲ取上ケサルニ因リ控訴院ニ控訴ヲ為シ控訴院ニテ初告裁判所ノ言渡ヲ取消シタル時ハ以

前訴へ出シタル初告裁判所ニ再ヒ其訴ヲ為シ又ハ控訴院ヨリ別段定メタル他ノ初告裁判所ニ其訴ヲ為ス可キ旨ヲ控訴院ヨリ言渡ス可シ

又既ニ初告裁判所ニ算計書ヲ出シ其裁判言渡アリシ後控訴院ニ控訴ヲ為シ控訴院ニテ初告裁判所ノ言渡ヲ取消シタル時ハ控訴院ニテ其言渡ノ如ク執行ヒ又ハ控訴院ニテ以前裁判ヲ為シタルヨリ更ニ他ノ初告裁判所ヲ別段指定メテ控訴院ノ言渡ヲ執行ハンム

可シ

第五百二十九條 算還ノ訴ヲ為ス數人皆其權利ノ同一ナル時ハ代書師一人ヲ任ス可シ若シ其數人代書師ヲ撰任スルニ付キ協議セサル時ハ代書師中ノ最モ先ニ其職ヲ得タル者ヲ撰ム可シ但シ其數人ハ各自ニ代書師ヲ任スルコトヲ得可シト雖モ其代書師ヲ任シタル費用及ヒ其代書師ノ為シタル費用ハ其訴ヲ為ス者各自ニ之ヲ擔當ス可シ

第五百三十條 算還ヲ為ス可キノ言渡書ニハ

算計書ヲ出ス可キ期限ヲ定メ且掛リ裁判役ヲ任ス可シ

第五百三十一條 算計書ノ前書ト算還ヲ為ス可キ者ヲ任シタル證書又ハ言渡書ノ記載及ヒ算還ノ言渡書ノ記載トヲ合シテ之ヲ六葉ト定ム可シ若シ其餘分ノ費用ハ裁判費用中ニ加フ可カラズ

第五百三十二條 算還ヲ為ス者ハ其旅費及ヒ算計ノ證書類ヲ整具シタル代書師ノ給料算計書ノ寫字料並ニ算計書ヲ裁判所ニ出シテ

真正ナリト述フルニ付テノ費用ヲ相手方ヨリ償ハシムルヲ得可シ

第五百三十三條 算計書ニハ現在ノ受取高ト費用高トヲ記シ其末ニ其差引高ヲ記ス可シ但シ他人ヨリ取返ス可キ權アル諸件ハ別ニ分テ之ヲ記ス可シ

第五百三十四條 算還ヲ為ス可キ者ハ掛リ裁判役ノ定メタル日ニ至リ相手方ニ代書師ナキ時ハ其本人ニ呼出狀ヲ送り又代書師アル時ハ其代書師ニ招書ヲ送り之ヲ呼出シタル

上ニ天自カラ其算計書ヲ出シ之ヲ真正ナリト述ヘ又ハ其名代人ヲシテ之ヲ出シテ真正ナリト述ヘシム可シ

算還ヲ為ス可キ者定期内ニ其手續ヲ為サル時ハ裁判所ニテ別段定メタル金高ニ至ル迄其財産ヲ抵償トシ差押ヘテ之ヲ賣リ又然ノミナラス裁判所ニテ至當ト思フ時ハ禁錮ヲ言渡ス可シ

第五百三十五條 算計書ヲ出シテ真正ナリト述ヘタル後受取高ノ費用高ニ過キタル時ハ

算還ノ訴ヲ為ス者其算計書ヲ別ニ承諾セス
シテ相手方ヲシテ其殘額ヲ拂ハレバ可キノ
裁判執行書ヲ掛リ裁判役ヨリ得ント求ムル
コトヲ得可シ

第五百三十六條 算還ヲ為ス可キ者算計書ヲ
出シ真正ナリト述ヘタル後之ヲ相手方ノ代
書師ニ送達シ又證書類ハ算還ヲ為ス可キ者ノ
代書師之ニ記號ヲ附シ且姓名ノ手署ニ代用
スル横線ヲ畫シテ一方ノ代書師ニ渡ス可シ
若シ一方ノ代書師受取書ト引替ヘテ其證書

類ヲ携ハ歸リタル時ハ掛リ裁判役ノ定メタ
ル期限内ニ之ヲ還ス可シ若シ其期限内ニ之
ヲ還ササル時ハ第一百七條ニ記シタル罰ヲ受
ク可シ

算還ヲ訴フル者數人ニテ各其代書師ヲ任シ
タル時ト雖モ其權利ノ同一ナルニ於テハ其
算計書及ヒ證書類ヲ其代書師中ノ最モ先ニ
其職ヲ得タル者ニ送ル可シ又其訴ヲ為ス數
人ノ權利各異ナル時ハ其代書師各人ニ此等
ノ書面ヲ送ル可シ

又訴訟ニ管スル債主數人アリテ各其代書師
アル時ト雖モ其中最モ先ニ其職ヲ得タル者
ノミニ算計書及ヒ證書類ヲ送ル可シ

第五百三十七條 飲食品ヲ賣ル者工丁、義塾ノ
授業師及ヒ此類ノ者ノ受取書ハ之ヲ算計ノ
證書トシテ出シタルト雖モ之ヲ官署ノ簿冊
ニ登記スルニ及ハス

第五百三十八條 掛リ裁判役ノ定メタル日刻
ニ至リ双方本人ハ其裁判役ノ面前ニ出席シ
テ互ニ辨論ヲ為シ裁判役ハ之ヲ調書ニ記ス

可シ若シ一方本人抗傳スル時ハ相手方其代
書師ヲシテ一方ノ代書師ニ招書ヲ送ラシメ
吟味ノ席ニ出ツ可キヲ要ム可シ

第五百三十九條 双方本人掛リ裁判役ノ面前
ニ於テ和解セサル時ハ其裁判役己レノ定メ
タル日ニ至リ吟味ノ席ニ申立ヲ為ス可キヲ
言渡ス可シ但シ双方本人ハ別ニ招書ヲ受
取ラスト雖モ吟味ノ席ニ出ツ可シ

第五百四十條 算還ノ訴ヲ裁判スル言渡書ニ
ハ受取高ト費用高トヲ記シ殘額アル時ハ其

殘額ヲ定ム可シ

第五百四十一條 一旦定マリタル算計書ハ之ヲ更改ス可カラス若シ双方本人其算計書ニ誤算又ハ詐偽アリト思フ時ハ更ニ此迄ノ裁判所ニ訴出ス可シ

第五百四十二條 若シ算還ノ訴ヲ為ス者抗傳ヲ為ス時ハ掛リ裁判役其定メタル日ニ至リ裁判所ニ申立ヲ為シ其訴ヲ為ス者ノ要ムル所確證アル時ハ相手方ヨリ其者ニ算還ヲ為ス可キヲ言渡ス可シ但シ相手方ノ預リタ

ル殘額アル時ハ其訴ヲ為ス者別段之ヲ取還ス可キノ要メヲ為スニ至ル迄相手方之ヲ保チ置キ別ニ其息銀ヲ拂フニ及ハス但シ後見人ノ算還ヲ為ス時ノ外總テ算還ヲ為ス可キ者ハ其殘額ヲ保チ置クニ付テノ保證人ヲ立ツ可ク若シ保證人ヲ立テサル者ハ其殘額ヲ官署ニ附托ス可シ

○第五章 裁判費用ノ高ヲ定ムル事

第五百四十三條 急速吟味ノ法式ヲ用ヒタル訴訟ニ付キテハ裁判費用ノ高ヲ其裁判言渡

書ニ附記シテ直チニ之ヲ定ム可シ

第五百四十四條 通常吟味ノ法式ヲ用ヒタル
訴訟ニ付キ裁判費用ノ高ヲ定ムル方法ハ假
リノ行政規則ヲ以テ別ニ之ヲ定ム但シ其行
政規則ハ訴訟法ト同日ニ之ヲ國中ニ行フ可
ク且當時ヨリ遅クトモ三年内ニハ相當ノ更
改ヲ為シタル上法律議案ノ體裁ニ為シ之ヲ
議院ニ出シテ議定セムレ可キモノナリ

○第六章 裁判言渡書及ヒ契約證書ノ
如ク強テ執行ハシムル事ニ付テノ

總規則

第五百四十五條 裁判言渡書及ヒ契約書類ハ

國ノ法律ニ等シキ前書ヲ記シ且第四百十六
條ニ記シタル如ク司法官吏ヲシテ之ヲ執行
ハシムル命令ノ語ヲ其末ニ記シタルニ非レ
ハ之ヲ執行フコトヲ得ス

第五百四十六條 外國ノ裁判所ニテ為シタル
裁判言渡及ヒ外國官吏ノ記シタル契約證書
ハ民法第二千百二十三條及ヒ第二千百二十
八條ニ記シタル場合ニ於テ其二條ノ方法ヲ

用フルニ非レハ佛蘭西ニ於テ之ヲ執行ノ可
カラス

第五百四十七條 佛蘭西國中ノ裁判所ノ言渡
書及ヒ佛蘭西官吏ノ記シタル契約證書ハ其
ノ言渡書ヲ記レ又ハ契約證書ヲ記シタル地ノ
裁判所ノ管轄外ニ於テモ驗印又ハ別段ノ命
令書ヲクレンテ全國中ニ之ヲ執行ノ可シ
第五百四十八條 契約ヲ為ス双方本人ニ非サ
ル者ヨリ為シタル故障ノ申立ヲ免ルハ裁判
言渡書及ヒ書入質ノ記入ヲ塗抹ス可キ裁判

言渡書又ハ訴訟ニ管セサル者ヨリ訴訟ノ一
方本人ニ金高ヲ渡ス可キノ裁判言渡書及ヒ
其他總テ訴訟ニ管セサル者ヲシテ或事ヲ為
サシム可キ裁判言渡書ハ一方ノ抗傳シテ負
訴訟トナルタル時其受ケタル裁判言渡ニ付
キ故障ヲ述フ可キ期限ノ後又ハ負訴訟ノ者
控訴ヲ為ス可キ期限ノ後ト雖モ克訴訟ノ本
人ヨリ相手方ノ住所ニ裁判言渡書ヲ送達シ
タル日附ヲ附記シタル其本人ノ代書師ノ請
合書ト負訴訟ノ者裁判言渡ニ付キ故障ヲ述

フルト又ハ控訴ヲ為ストナキ旨ヲ證スル書
記官ノ請合書トテ同上ノ裁判言渡書ニ添ヘ
テ訴訟ニ管セサル者ニ送達シタルニ非サル
ハ其者ヲレテ其言渡書ノ如ク執行ハシム可
カラス

第五百四十九條 前條ニ記シタル如ク負訴訟
ノ者裁判言渡ニ付キ故障ヲ述フルト又ハ控
訴ヲ為ストノ有無ヲ書記官ニ知ラシム可キ
カ為メ其故障ヲ述ヘ又ハ控訴ヲ為ス者ノ代
書師ハ第百六十三條ニ記シタル規則ニ循ヒ

此等ノ事ヲ簿冊ニ登記ニ置ク可シ

第五百五十條 双方相争フ物ノ附托ヲ受クル
者、書入質ノ管轄者及ヒ其他訴訟ニ管セサル
者ハ負訴訟ノ者故障ヲ述ヘ又ハ控訴ヲ為ス
トテ簿冊ニ記シタルトナキ旨ヲ書記官ノ證
シタル受合書ヲ受取タル上ニテ其裁判言渡
書ノ如ク執行フ可シ

第五百五十一條 一方ノ者負訴訟トナリ裁判
言渡ヲ受ケタル後猶其言渡ノ如ク行ハサル
ニ因リ其動産又ハ不動産ヲ抵償トシテ差押

ユルニハ必ス相手方其得可キ金高ノ定マリ
 テ且確證アル可ク并ニ裁判言渡ノ如ク執行
 ノ可キノ書ヲ有スルトヲ必要トス若シ其相
 手方ノ得可キモノ金高ニ非サル時ハ其動産
 又ハ不動産ノ差押ヲ為シタル後相手方ニテ
 得可キ高ヲ定ムルニ至ル迄其他ノ手續ヲ猶
 豫ス可シ

第五百五十二條 負訴訟ノ者相手方ニテ價高
 ノ定ムルトヲ得可キ物件ヲ相手方ニ還サ、
 ルニ付キ禁錮ノ言渡ヲ受ケタルト雖モ相手方

ニテ其價高ヲ定メタル後ニ非レハ其言渡ノ
 如ク執行ヲ可カラス

第五百五十三條 商法裁判所ノ言渡書ヲ執行
 ノニ付キ争ノ生シタル時ハ其執行ノ手續ヲ
 為ス地ヲ管轄スル初告裁判所ニ之ヲ訴フ可
 シ

第五百五十四條 裁判所ノ言渡書又ハ契約證
 書ノ如ク執行ヲニ付キ生シタル争ヲ急速ニ
 裁判スル時ハ其執行ヲ為ス地ノ裁判所ニテ
 假リニ其争ヲ裁判シ其後是迄ノ裁判所ニテ

其確定ノ裁判ヲ為ス可シ

第五百五十五條 裁判所ノ官吏其職務ヲ行フ

ニ當リ不敬ヲ受ケタル時ハ其不敬ヲ為シタ

ル者ノ官命ニ抗セシ旨ヲ調書ニ記シ治罪法

ニ記シテ之ヲ規則ニ從テ之ヲ處置ス可シ

第五百五十六條 克訴訟ノ者ヨリ裁判言渡書

又ハ契約證書ヲ使吏ニ渡シタルノミニテ使

吏ハ之ヲ執行フ可キノ權ヲ得タルモノトス

但シ不動産差押及ヒ禁錮ノ言渡ヲ執行フニ

付テハ使吏別ニ本人ヨリ其執行ノ為メノ委

任狀ヲ受クルトテ必要トス

○第七章 負債者ニ人ヨリ物件ヲ渡ス

トテ其債主ノ差留ムル事

第五百五十七條 總テ債主ハ其負債者ニ人ヨ

リ物件ヲ渡ストテ公私ノ證書ヲ以テ證ト為

シ差留ムルトテ得可シ

第五百五十八條 公私ノ證書共ニアラサル時

ハ負債者住所ノ裁判所又時トシテハ負債者

ニ物件ヲ渡ス可キ者ノ住所ノ裁判所ニテ債

主ノ願ニ應シ其渡方差留ヲ為ス可キトテ許

スヲ得可シ

第五百五十九條 公私ノ證書ヲ以テ證ト為シ
 同上ノ渡方差留ヲ為スノ書面ニハ其證書並
 ニ渡方ノ差留ヲ為スニ付テノ金高ヲ記ス可
 シ又裁判所ノ許シニ因リ其差留ヲ為ス時ハ
 其言渡書ノ寫ヲ差留書面ノ初ニ記入ス可シ
 但シ其裁判所ノ言渡書ニハ渡方差留ヲ為ス
 ニ付テノ金高ヲ記入ス可シ
 債主同上ノ渡方差留ヲ為サント願出ツル時
 其負債者ヨリ得可キ高ノ未定ナルニ於テハ

裁判役假リニ之ヲ評價シテ定ム可シ
 同上ノ渡方差留ノ書面ニハ其差留ヲ為ス者
 其差留ヲ受クル者ト其住所ノ地互ニ異ナル
 時ハ其差留ヲ受クル者ノ住所ノ地ニ自カラ
 別段住所ヲ擇ミタル旨ヲ附記ス可シ
 此等ノ諸件ヲ記セサル渡方差留ノ書面ハ其
 効ナカル可シ

第五百六十條 佛蘭西本國外ニ住スル者ヨリ
 物件ヲ負債者ニ渡スヲ債主ノ差留ムル書
 面ハ檢事ニ送達ス可カラズ其差留ヲ受クル

者又ハ其住所ニ其書面ヲ送達ス可シ第六十九條ノ

第九項
見合

第五百六十一條 租稅受取人又ハ官金ヲ預リ

或ハ支配スル者ヨリ物件ヲ負債者ニ渡ス

ヲ債主ノ差留ル書面ハ之ヲ受取ル為メ別段

定メタル者ニ之ヲ送り其者之ヲ受取テ其正

本ニ檢印ヲ為シ若シ又其者檢印ヲ為ス

肯セサル時ハ檢事其檢印ヲ為シタルニ非サ

レハ其効ナカル可シ

第五百六十二條 人ヨリ負債者ニ物件ヲ渡ス

トテ債主ノ差留ル書面ニ姓名ヲ手署レタル

使吏ハ其差留ヲ為ス權ヲ得タル時其差留ヲ

為ス本人ノ現ニ存在シタル證ヲ立ツ可キ要

ヲ受ケタルニ於テハ必ス之ヲ立ツ可シ若レ

此規則ニ背ク時ハ其職ヲ停止セラレ且損失

ノ償ヲ為ス可シ

第五百六十三條 債主ノ物件渡方ヲ差留タル

ヨリ八日ノ定期ニ差留ヲ受ケタル者ノ住所

ト債主ノ住所トノ間三「ミリヤメートル」毎ニ

一日ヲ増加シ及ヒ債主ノ住所ト負債者ノ住

所トノ間三「ミ」リヤメートル毎ニ更ニ一日ヲ
増加シタル期限内ニ債主ヨリ渡方差留ノ書
面ヲ負債者ニ送リテ其差留ノ法ニ適シタル
ヤ否ヲ裁判スル席ニ之ヲ呼出ス可シ

第五百六十四條 前條ノ呼出ノ日ヨリ八日ノ
定期ニ住所ノ距離ニ從テ日數ヲ増加シタル
期限内ニ裁判所ノ使吏債主ノ求メニ因リ差
留ヲ受クル者ニ負債者ヲ呼出シタル旨ヲ告
知ス可シ但シ其差留ヲ受クル者ハ其告知ヲ
得ル前ニ負債者ニ渡ス可キ物件ノ有無ヲ陳

述スルニ及ハス

第五百六十五條 若シ債主渡方差留ヲ為ス
ノ法ニ適シタルヤ否ノ裁判ヲ願ハサル時ハ
其差留ノ効ナカル可シ又債主ヨリ差留ヲ受
ケタル者ニ同上ノ願ヲ為シタル旨ヲ告知ス
ル前ニ其者ヨリ負債者ニ物件ヲ渡シタル時
ハ其渡シタルノ効アリトス

第五百六十六條 同上ノ渡方差留ノ法ニ適シ
タルヤ否ノ裁判ヲ願フ前ニ原告被告預メ勸
解ノ式ヲ為スニ及ハス

第五百六十七條 同上ノ渡方差留ノ法ニ適レタルヤ否ノ裁判ヲ願フ訴及ヒ負債者其差留ヲ除去セント願フ訴ハ其負債者住所ノ裁判所ニ之ヲ為ス可シ

第五百六十八條 債主公正ノ證書ヲ有シ又ハ裁判所ニテ同上ノ渡方差留ヲ法ニ適シタルモノナリト為ス言渡書アルニ非レハ差留ヲ受ケタル者ヲ裁判所ニ呼出シ其者ヲシテ負債者ニ渡ス可キ物件ノ有無ヲ陳述セシム可カテス

第五百六十九條 第五百六十一條ニ記レタル官吏ハ負債者ニ渡ス可キ物件ノ有無ヲ陳述スル為メ裁判所ニ呼出ヲ受クルヲナカル可シ但シ其官吏ハ負債者ニ渡ス可キ物件アルヲ證スル請合書ヲ裁判所ニ出ス可ク又其物件ノ價高ノ定リタル時ハ其價高ヲ請合書ニ附記ス可シ

第五百七十條 渡方差留ヲ受ケタル者ハ預メ勸解ノ式ヲ行フヲナク渡方差留ノ訴ヲ裁判所ニ呼出ヲ受ク可シ若シ其者負

債者ニ渡ス可キ物件ノ有無ヲ陳述シタル事
ニ付キ争ノ生スル時ハ自己ノ住所ノ裁判所
ニ於テ其裁判ヲ得ント求ムルヲ得可シ

第五百七十一條 渡方差留ヲ受ケタル者ハ其
訴ヲ裁判ス可キ裁判所ノ書記局ニ至リ其負
債者ニ渡ス可キ物件ノ有無ヲ陳述シテ誓ヲ
為ス可シ又事故アリテ其訴ヲ管スル裁判所
ニ出席セサル時ハ自己ノ住所ノ治安裁判役
ノ面前ニテ同上ノ陳述ト誓トヲ為ス可シ但
シ此場合ニ於テハ渡方差留ノ訴ヲ管スル裁

判所ノ書記局ニ至リテ再ヒ誓ヲ為スニ及ハ
ス

第五百七十二條 前條ニ記シタル陳述ト誓ト
ハ別段任シタル名代人ヲ出シテ之ヲ為サシ
ムルヲ得可シ

第五百七十三條 渡方差留ヲ受ケタル者ノ陳
述書ニハ其者ヨリ負債者ニ物件ヲ渡ス可キ
原由ト其總高トヲ記シ又其總高ノ中既ニ一
部分ヲ渡シタル時ハ其渡シタル高ヲ記シ又
既ニ其總高ヲ渡シタル時ハ其渡シタル時ノ

請取證書ノ文面ヲ記シ或ハ既ニ之ヲ渡ス可
 キ義務ノ釋放ヲ得タル時ハ其釋放ヲ得タル
 原由ヲ記シ且何レノ場合ニ於テモ其渡方差
 留ヲ受ケタル旨ヲ記ス可シ
 第五百七十四條 前條ノ陳述書ニ附加ス可キ
 證書類ハ其書ニ添ヘ置キ此等ノ書面ヲ書記
 局ニ納メ且之ヲ納メタル旨ヲ記シタル書面
 ヲ記シテ之ニ代書師ヲ任シタル旨ヲ附記シ
 其差留ヲ為シタル者ニ送達ス可シ
 第五百七十五條 是迄差留ヲ受ケタル外更ニ

他ノ差留ヲ受ケル時ハ之ヲ受ケタル者更ニ
 差留ヲ為ス者ノ姓名及ヒ其者ノ擇ミタル住
 所並ニ其差留ノ原由ヲ書面ニ記シテ是迄ノ
 差留ヲ為シタル者ノ代書師ニ送達ス可シ
 第五百七十六條 差留ヲ受ケタル者ノ陳述書
 ヲ差留ヲ為ス者ヨリ争フヲナキ時ハ其差留
 ヲ受ケタル者及ヒ差留ヲ為ス者其他ノ訴訟
 ノ手續ヲ為スニ及ハス
 第五百七十七條 差留ヲ受ケタル者同上ノ陳
 述ヲ為サス又ハ陳述ヲ為スト雖モ前數條ニ

記シタル如ク證ヲ立テサル時ハ其者差留ヲ
為シタル者ノ述フル所ノ總高ヲ負ヒタルモ
ノト看做ス可シ

第五百七十八條 動産ノ渡方差留ヲ受ケタル
時ハ之ヲ受ケタル者其動産ノ詳細ナル目錄
ヲ其陳述書ニ添フ可シ

第五百七十九條 債主ノ訴ヘタル渡方差留ヲ
裁判所ニテ免許スル時ハ此卷ノ第十一章百六
五十六條以下ニ記シタル如ク其渡方差留ヲ為シタ
ル財産ヲ賣拂フテ其價高ヲ分派ス可シ

第五百八十條 官ヨリ與フル所ノ給料及ヒ扶
助料ハ別段ノ法律又ハ規則及ヒ命令ニテ定
メタル部分ノ外其渡方ヲ差留ム可カラス

第五百八十一條

第一 法律ニ因リ渡方ヲ差留ム可カラサ
ルノ定メアル物件第五百九十
二條見合

第二 裁判所ヨリ許シタル養料

第三 贈遺ヲ為ス者抵償トシテ差押エ可
カラスト別段定メタル金高及ヒ物件但
シ其者ノ隨意ニ贈遺ト為ス可キ財産定

分ニ限ル可シ

第四 贈遺ヲ為ス證書ニ渡方ヲ差留ム可
カラスト別段定メタルヲナシト雖モ養
料トシテ與ヘタル金高

此等ノ物ハ其渡方ヲ差留ム可カラス

第五百八十二條 前條ニ記シタル養料外雖モ
他ノ養料ノ訴ニ付テハ其渡方ヲ差留ムルヲ
得可シ又前條ノ第三第四ニ記シタル物件
ト雖モ其贈遺ヲ為シタル後ノ債主ヨリ其渡
方ヲ差留ムルヲ得可シ但シ其差留ヲ為ス

ニハ別段裁判所ノ允許ヲ得可ク且裁判所ヨ
リ定ムル所ノ部分ノミニ限ル可シ

辻 士革 校

佛蘭西 法律書 訴訟法 四終

